第69回（2025年度）　北海道開発技術研究発表会論文

20周年を迎えたシーニックバイウェイ北海道と効果検証
―景観づくり活動における地域愛着形成効果の把握―

北海道開発局 建設部 道路計画課　○牧野　一輝
髙橋　直之
一般社団法人 北海道開発技術センター　芝崎　拓

2005年に開始されたシーニックバイウェイ北海道（SBW）は、2025年3月に20周年を迎えた。当初3ルートから始まった本取り組みは、現在では15の指定ルートおよび2つの候補ルートへと拡大している。本研究では、SBWの景観づくり活動が地域住民の地域愛着に与える影響を検証するため、SBWの象徴的な活動の運営関係者を対象にアンケート調査を実施した。地域愛着の3つの尺度（選好、感情、持続願望）により分析した。

キーワード：シーニックバイウェイ、効果検証、景観づくり、地域愛着、官民連携

1. はじめに

シーニックバイウェイ北海道（以下、SBW）は、2005年に国土交通省北海道開発局により開始された官民連携による地域振興の取り組みである。この制度は、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを基本方針として、地域への愛着や誇りの醸成、北海道での快適な旅行環境の形成、地域ブランドの確立などを目的としている。

SBWは当初、大雪・富良野ルート、支笏洞爺ニセコルート、東オホーツクシーニックバイウェイの3ルートから始まったが、2025年現在では15の指定ルートおよび2つの候補ルートまで拡大し、SBWに参加する活動団体は約500団体にのぼり、北海道全域にわたる広範囲な展開を見せている。

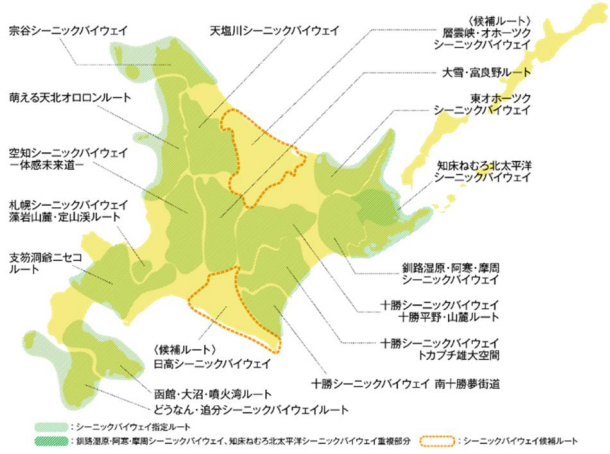

図-1　シーニックバイウェイ北海道全道図

各ルートでは、花植え活動、清掃活動、景観保全、観光振興イベントなど、地域の特性を活かした多様な活動が展開されており、地域住民、企業、行政が一体となった取り組みが継続されている。

SBWが20周年を迎える中、これまでの活動が地域に与えた具体的な効果については、体系的に評価・検証された例は多くない。特に、制度の理念の一つである「地域への愛着や誇りの醸成」について、定量的な効果測定は限られているのが現状である。

そこで本研究では、SBWの20年間の活動が地域住民の意識や地域との関係性にどのような影響を与えてきたのかについて検証し、特に景観づくり活動が地域愛着の形成に与える効果を定量的に明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

(1) 理論的枠組み

本研究では、地域愛着の概念について、萩原・藤井(2005)[1]および鈴木・藤井(2008)[2]の先行研究に基づき、地域愛着の尺度（選好を「個人的な観点から地域に対する単純な好き嫌いに対する評価」、感情を「地域を大切に思い、愛着を感じ、住み続けたいと感じる意識」、持続願望を「地域そのものの在り方に対する願い、永続願望を表す意識」）と整理し、以降の分析や考察ではこの定義に基づいて評価を行う（**表-1**）。

(2) 調査設計

a) 調査対象活動の概要

【はこだて花いっぱい運動（函館・大沼・噴火湾ルート）】

MAKINO kazuki, TAKAHASHI naoyuki, SHIBAZAKI taku

はこだて花いっぱい運動は、函館新道沿い約8kmにわたる花ロード「はこだて花かいどう」を舞台とした景観づくり活動である。本活動は2005年のSBW開始当初から継続している代表的な景観づくり活動の一つであり、活動開始から20年近く継続されている。

表-1　地域愛着の尺度

尺度	概要
選好	個人的な観点から地域に対する単純な好き嫌いを表す尺度。 「地域は住みやすいと思う」「地域ではリラックスできる」などの項目により測定。
感情	地域に愛着を感じ、住み続けたいと感じる尺度。 「地域に愛着を感じる」「地域にずっと住み続けたい」「地域は大切だと思う」などの項目により測定。
持続願望	地域そのものの永続願望を表す尺度。 「地域がずっと続いてほしい」「地域の将来が心配である」などの項目により測定。

活動の特徴は、地域住民、企業、少年団など多様な主体が参加する官民連携の取り組みであることである。毎年5月下旬から6月上旬にかけて数百名規模の参加者が集う大規模花植えイベントとして開催するとともに、年間を通じて定期的な草取り、水やり、管理作業等の継続活動を行っている。

図-2　はこだて花いっぱい運動の様子

【シーニックナイト（支笏洞爺ニセコルート）】

シーニックナイトは、支笏洞爺ニセコルートにおける冬季の景観づくりである。雪と氷という冬の地域資源を活用した広域ライトアップイベントとして展開されており、アイスキャンドルの設置、雪像制作など住民主体の企画・運営により実施されている。

本活動は地域内外の交流促進を目的とした参加型イベントとして位置づけられており、地域食材を活用した飲食提供など、地域資源の総合的な活用が図られている。冬の厳しい気候をマイナス要因ではなく、地域資源として再発見・再評価する試みとして注目される。

図-3　シーニックナイトの様子

b) 調査方法

長期に渡りSBW活動として展開されている2つの活動を対象に、活動の運営関係者に対して、アンケート調査を実施した（表-2）。

表-2　調査方法

項目	内容
調査対象	①函館・大沼・噴火湾ルート「はこだて花いっぱい運動」運営関係者77名 ②支笏洞爺ニセコルート「シーニックナイト」運営関係者86名
調査方法	運営関係者に対するアンケート調査
調査時期	①令和6年10月～11月 ②令和7年1月～2月

c) 調査内容

アンケート調査内容は、基本属性の他、活動参加に関する意向・意識、地域愛着に関する設問等、以下の5項目について質問を設定した（表-3）。

表-3　調査票の構成

No	分類	設問項目
①	基本属性	性別・年齢、居住年数、居住形態、家族構成等
②	活動参加に関する意向・意識	参加回数、参加理由、参加意向等
③	地域の魅力度・愛着度	地域愛着の3尺度を用いた複数質問項目
④	活動参加による地域愛着の変化	参加前後の比較
⑤	活動に関する意見・要望	（自由回答）

地域愛着の測定には、「③ 地域の魅力度・愛着度」として表-1で示した「選好（個人的な好き嫌い）」「感情（愛着と居住継続願望）」「持続願望（地域の永続願望）」の3つの尺度を用い、全13の設問を設定し、各項目について「思う」から「思わない」までの5段階評価で回答を求めた（表-4）。

3. 調査結果

(1) 回答者の属性

はこだて花いっぱい運動の被験者については、約7割

が男性で、年代は50～59歳が最も多かった（図-4）。居住年数では20年以上が約半数を占める一方で、3年未満の被験者も全体の2割ほど存在した（図-5）。

シーニックナイトの参加者についても同様の傾向を示し、地域への定着度の高い住民が主要な参加者となっている一方で、比較的新しい住民の参加も一定程度見られた。

表-4　地域愛着の設問

地域愛着（選好）	① 地域は住みやすいと思う ② 地域にお気に入りの場所がある ③ 地域を歩くのは気持ちよい ④ 地域ではリラックスできる ⑤ 地域の雰囲気や土地柄が気に入っている ⑥ 地域が好きだ
地域愛着（感情）	⑦ 地域は大切だと思う ⑧ 地域に自分の居場所がある気がする ⑨ 地域にずっと住み続けたい ⑩ 地域に愛着を感じている ⑪ 地域は自分のまちだという感じがする
地域愛着（持続願望）	⑫ 地域にいつまでも変わって欲しくないものがある ⑬ 地域になくなってしまうと悲しいものがある

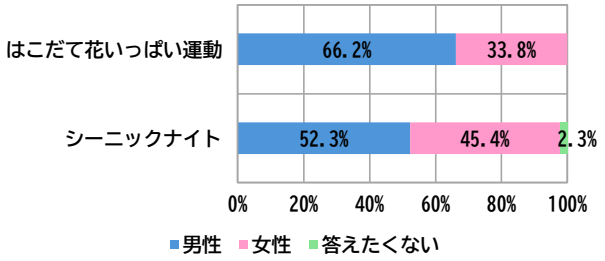

図-4　性別

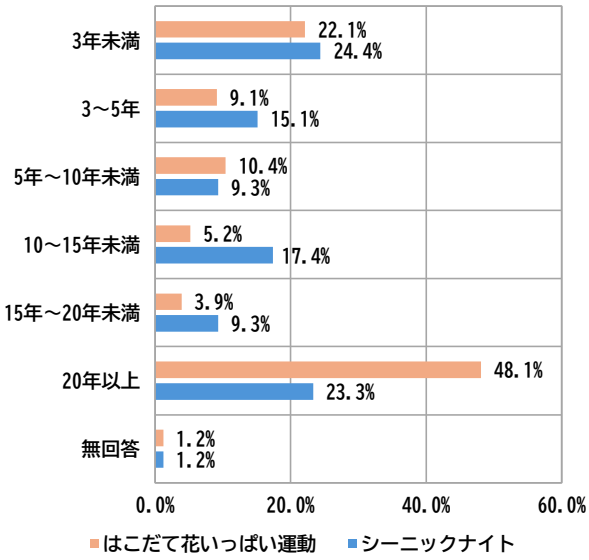

図-5　居住年数

(2) 地域愛着の分析結果

地域愛着の分析については、地域愛着の設問における「思う」を5点、「思わない」を1点と5段階評価の回答を点数化し、各活動の参加回数別に平均値を算出した。

【はこだて花いっぱい運動（函館・大沼・噴火湾ルート）】

地域愛着の3つの尺度（図-6）について詳細に分析した結果、特に感情（地域を大切に思い、愛着を感じ、住み続けたいと感じる意識）に関する点数が最も高くなった。

尺度を構成する項目別（図-7）では、「地域は大切だと思う（感情）」の点数が最も高いほか、「地域は住みやすいと思う（選好）」「地域にずっと住み続けたい（感情）」「地域ではリラックスできる（選好）」も高い数値を示した。

活動への参加回数が多ければ多いほど愛着度も上昇傾向にあり、中でも感情に関する点数が高いのが特徴的である。

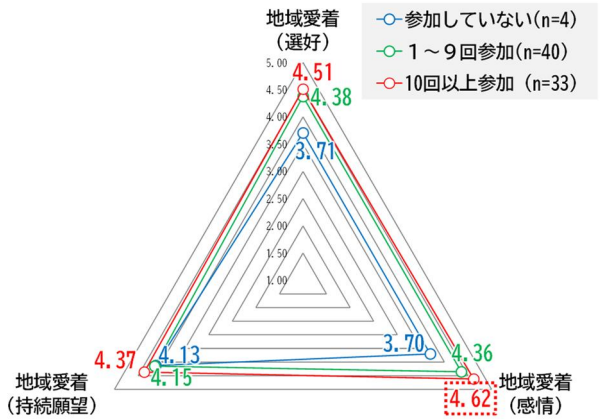

図-6　はこだて花いっぱい運動地域愛着３尺度での分析

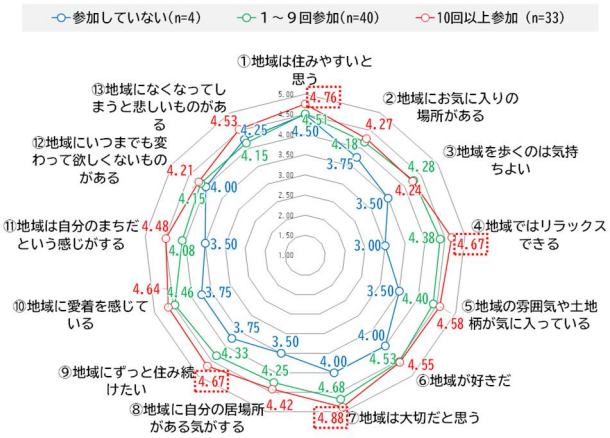

図-7　はこだて花いっぱい運動　地域愛着

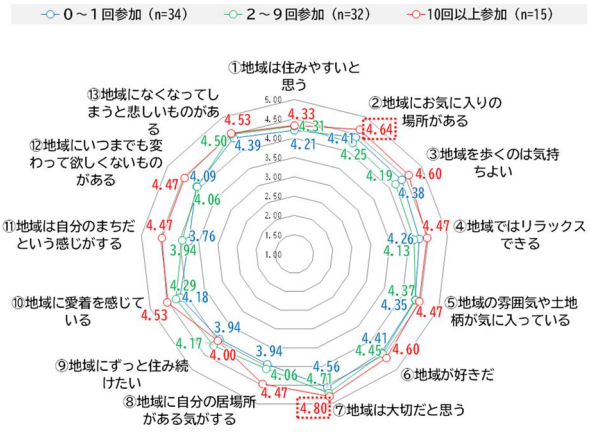

図-9　シーニックナイト　地域愛着

【シーニックナイト（支笏洞爺ニセコルート）】

地域愛着の3尺度（図-8）について分析した結果、選好（個人的な観点から地域に対する単純な好き嫌いに対する評価）と持続願望（地域そのものの在り方に対する願い、永続願望を表す意識）の点数が目立った。

尺度を構成する項目別（図-9）では、「地域は大切だと思う（感情）」のほか「地域にお気に入りの場所がある（選好）」などの点数が高値を示した。

はこだて花いっぱい運動と同様に、参加回数と愛着度が比例しており、特に、10回以上参加した方の愛着度が顕著に高かった。

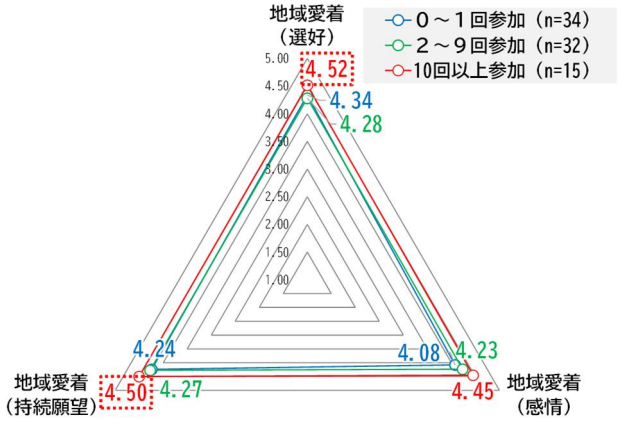

図-8　シーニックナイト地域愛着３尺度での分析

(3) 参加回数と居住意向の関係

両活動において、参加回数が多いほど地域愛着度が高くなる傾向がアンケート結果から確認された。特に10回以上参加した参加者については顕著で、特に、はこだて花いっぱい運動では、回答した全員が「これからもずっと住み続けたい」「当分は住み続けたい」「一時的に引っ越すかもしれないがまた戻ってきたい」といった定住意向を示した（図-10，図-11）。

また、活動に参加していない住民と比較すると、参加者の定住意向は明らかに高く、活動参加が地域への定着意識に正の影響を与えていることが示された。

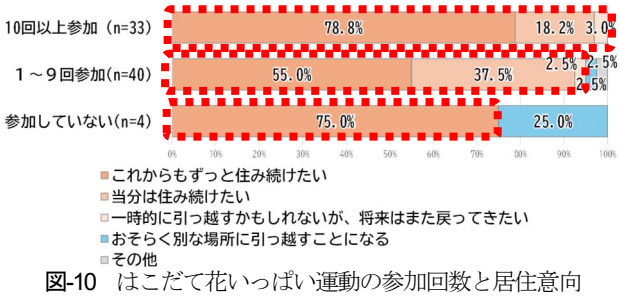

図-10　はこだて花いっぱい運動の参加回数と居住意向

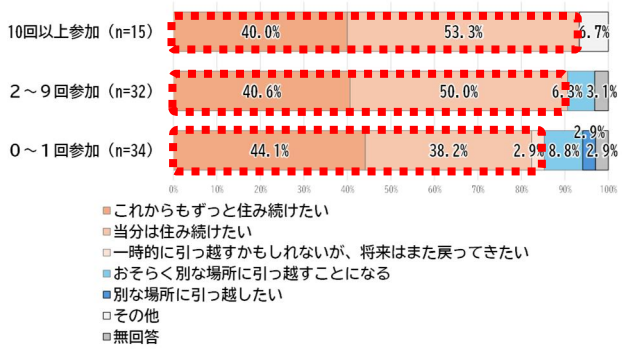

図-11　シーニックナイトの参加回数と居住意向

(4) 地域愛着の変容

活動参加前後における地域愛着の変化を比較した結果、どちらの活動においても愛着が深まっている傾向が確認された。特に、はこだて花いっぱい運動では参加後に「愛着がある」と回答した人数は、参加前と比べて倍以

上に増加しており、シーニックナイトでも大きな増加を示した。また、参加前に「普通」と回答していた住民の多くが、参加後には「愛着がある」「やや愛着がある」と回答するようになった（図-12，図-13）。

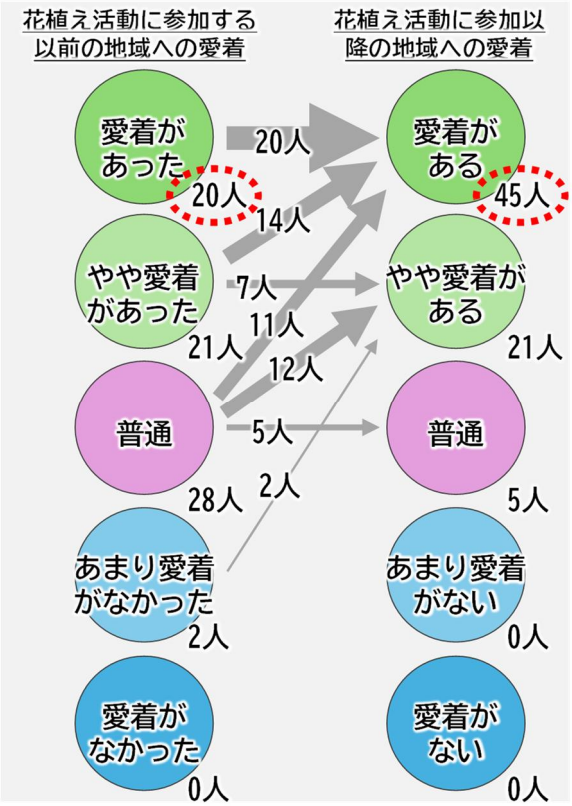

図-12　はこだて花いっぱい運動　地域愛着の変容

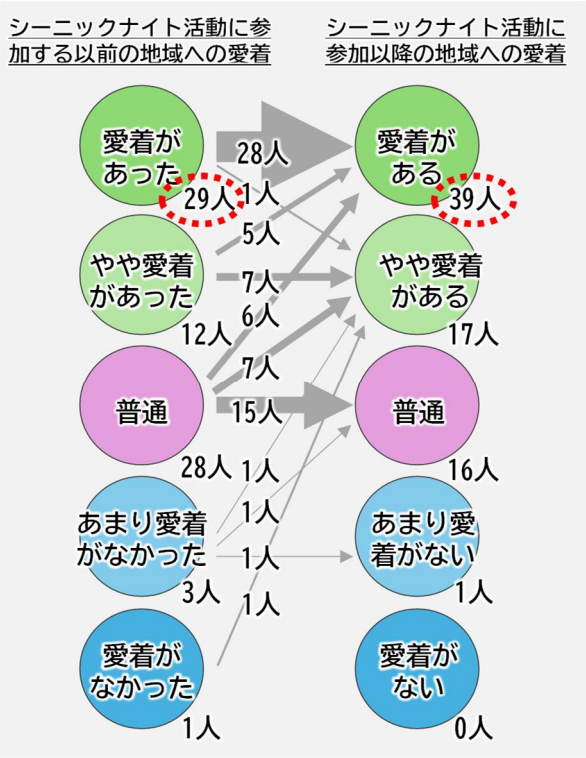

図-13　シーニックナイト　地域愛着の変容

4. 考察

(1) 実践的示唆

本研究の結果から、継続的な地域づくり活動への参加が地域愛着の形成に有効であることが実証された。特に、参加頻度と愛着度に正の相関（図-6・図-8）が確認されたことは、一過性のイベントではなく、継続的な関わりが重要であることを示している。

また、はこだて花いっぱい運動やシーニックナイトに参加することによって得られる副次的効果として、「地域での他の活動への参加のきっかけとなった」「世代間の交流が活発になった」「地域の景観をほめられるようになった」などが挙げられており、直接的な地域愛着の向上以外にも、地域コミュニティの活性化に寄与していることが明らかとなった（図-14）。

(2) SBW活動への示唆

SBWの20年間にわたる継続的な取り組みが、確実に地域住民の意識変化をもたらしていることが実証された。当初の3ルートから15指定ルート＋2候補ルートへの拡大は、各地域での成果が他地域に波及した結果とも考えられる。

官民連携による地域づくりの有効性も確認され、行政主導ではなく地域住民が主体的に参加できる仕組みづくりの重要性が示された。参加者の9割以上が「今後も参加し続けたい」「機会があれば参加したい」と回答していることは、活動の持続可能性を示している（図-15）。

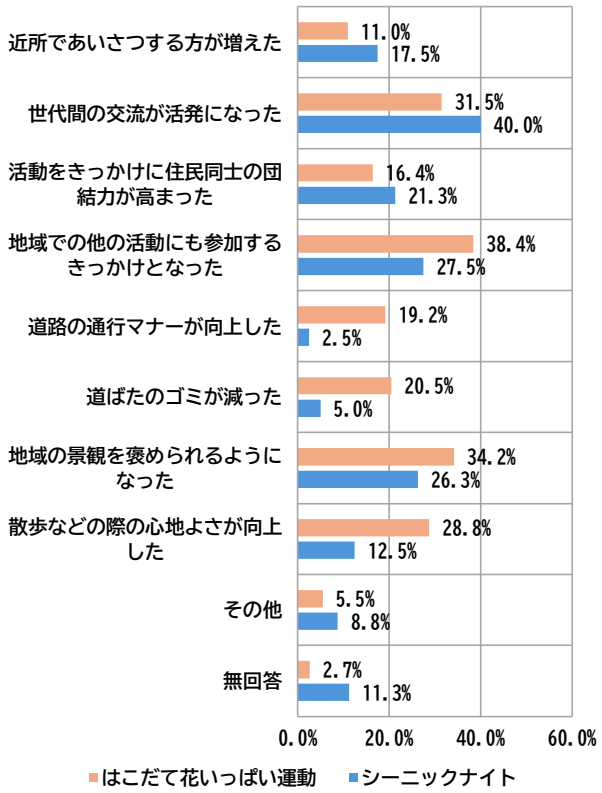

図-14　活動に参加することで得られる副次的効果

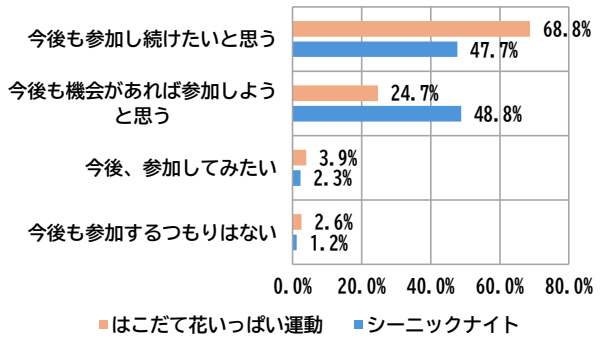

図-15　活動の継続意向

(3) 他地域への応用可能性

本研究で確認された景観づくり活動を通じた地域愛着形成モデルは、今回調査対象としたルート以外のルートでも応用可能と考えられる。特に、地域の特性を活かした継続的な活動、住民の主体的参画、世代を超えた交流機会の創出といった要素は、普遍的な効果をもたらす可能性が高い。

政策的インプリケーションとしては、地域振興施策の評価において、経済効果だけでなく住民の地域愛着や定住意向といった質的側面の重要性が示された。長期的な地域の持続可能性を考える上で、住民の地域への愛着や誇りの醸成は重要な政策目標となり得る。

5. 今後の課題

本研究にはいくつかの課題がある。まず、サンプルサイズが限定的であり、2つの活動のみを対象としているため、SBW全体の効果を一般化するには慎重である必要がある。また、運営関係者を対象とした調査であるため、地域住民や見物客との比較が十分ではなく、選択バイアスの可能性も考慮する必要がある。

因果関係の特定についても、地域愛着の向上が活動参加によるものか、もともと愛着の高い住民が活動に参加する傾向があるのかについては、本研究の結果のみでは断定できない。

今後の研究課題としては、他の SBW ルートへの調査の展開、活動参加者と非参加者の比較研究、長期的な追跡調査による因果関係の解明などが挙げられる。また、経済効果や観光振興効果など、他の側面での効果検証も重要な課題である。

6. おわりに

本研究により、SBW の地域づくり活動が地域住民の地域愛着形成に明確な効果をもたらしていることが実証された。活動参加により地域愛着が増幅し、参加頻度と愛着度に正の相関が確認されたことは、継続的な活動参加の重要性を示している。

SBW 北海道 20 周年の節目において、これまで蓄積されてきた地域づくり活動の成果を「地域愛着」という視点から可視化した点に意義があり、地域づくり活動の継続的価値は、短期的な成果だけでなく、長期的な地域の持続可能性に寄与する住民の地域愛着や誇りの醸成にあることが示された。今後も、官民連携による継続的な取り組みを通じて、より多くの地域でこうした効果の実現が期待される。

7. 謝辞

本研究の実施にあたり、アンケート調査にご協力いただいた「はこだて花いっぱい運動」および「シーニックナイト」の運営関係者の皆様、ならびに調査にご協力いただいた関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

1) 土木計画学研究・論文集：交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析（2005、萩原剛、藤井聡）
2) 土木計画学研究・地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究（2008、鈴木春奈、藤井聡）